

《特集Ⅰ》第17回日本思春期学会学術集会

特別講演

よりよい思春期の心と体の健康をつくるには

—Child Ecology の立場から

チャイルド・リサーチ・ネット所長

甲南女子大学国際子ども学研究センター所長

東京大学名誉教授

国立小児病院名誉院長

小 林 登

21世紀がいよいよ目前に迫ってきたが、現在の社会のいろいろな局面では逼塞状態がみられる。政治・経済・教育ばかりでなく、自然科学が関係する分野でも例外ではない。

その要因は決して簡単なものでないが、ひとつにデカルト以来の自他分離の中で育った要素還元論 Reductionism の行詰まりも関係しているという。ある意味ではヨーロッパのロゴスの破綻を意味しよう。現在の問題を解決し、よりよい21世紀を迎えるには、パラダイムの転換が求められる。即ち、自他非分離の統合論的な考えの中で、「場」とか「関係」、さらには「共生」とか「共創」などが強調されなければならない。

われわれが関心をもつ思春期学も例外でない。思春期の子どもたちが、家庭や学校、さらには社会で多様な問題行動をおこし、それがニュースにならない日はないことをみても明らかである。筆者は、第17回日本思春期学会会長筒井末春教授より、「よりよい思春期の心と体をつくるには」という特別講演の題をいただき、学際的な研究を目的とするインターネットによるサイバー子ども学研究所 Child Research Net (<http://www.crn.or.jp/>) のささやかなデータも加えて日頃

考えていることを、上記のタイトルで発表した。Child Ecology の立場から、としたのは、パラダイムの転換も目指したからである。

本文は、筆者の特別講演を整理し、総説としてまとめたものである。また、体の健康より心の健康を中心にしたのは、発表時間に限りがあったこともあるが、現在心の健康の方が重要であり、日頃関心をもっていることにもよる。同学の志よりの忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

I. Child Ecology の立場とは^{1, 2)}

前世紀末ドイツのE. Haeckelによって提唱されたEcology生態学は、生物の生理機能と無機環境の関係を、Darwinismの立場も加えて、明らかにしようとする生物学の分野である。簡単にいえば、生物の生活に関する生物学といえる。当時すでに「関係」という概念があったことは注目に値する。

第二次世界大戦後、生態学は人間も取り込み、人間生態学Human Ecologyを体系付けた。霊長類学の体系付けと発展、さらに伝統文化の人々を研究する文化人類学などの流れも、それに大きな力になったといえる。

人間生態学の流れは、「エコロジー運動」、即ち、1960年代から明らかになってきた先進化・工業化による土壌・大気・水などの汚染問題、さらに原発問題などに対する市民運動とも関係する。そして、哲学を含めた人文科学の理念にも Ecology が取り込まれ、特に人間の心理・行動・文化・芸術・道徳などの問題も対象とする人間生態学が大きく展開することになった。Child Ecology は、子どもを中心にした人間生態学である。

生態学における研究方法論の主流は、システム論的な立場にある。生物とその生活の場にある非生物的存在をあわせて生態系・Ecosystem としてとらえ、その中で物質とエネルギーの流れを分析する方法である。人間生態学では、物質・エネルギーばかりでなく、情報も考えなければな

らない。

Child Ecologyでは、生態系の整理は簡単ではない。即ち、子どもは家庭、幼稚園・保育園・学校、そして社会の中で多様な人間関係をもって生活し、成長・発達しているからである。筆者は Doxiadis・Lourie, さらに Bronfenbrenner らの提唱したモデルを修正して、図1のような同心円構造を提案し、次の4つに整理している。

(1)親・兄弟姉妹のような特に親しい人間関係、Micro-ecosystemと呼べる。

(2)社会の基本単位として家庭の人間関係、親子・兄弟姉妹ばかりでなく、その他の人間関係、Mini-ecosystem と呼べる。

(3)保育園・幼稚園、学校などでの人間関係、即ち保母・教員、友人などとの人間関係、Meso-ecosystem と呼べる。

(4)社会生活における近隣などでの人間関係、Macro-ecosystem と呼べる。

こうしてみると、子どもは特に親しい人間関係 Microecosystem の衣を着て、Miniecosystem, Mesoecosystem, Macroecosystem の中で生活しているといえよう。

このそれぞれの人間関係としての生態系の中には、自然因子、物理化学因子、生物因子、そして社会文化因子が存在し、子どもはそれらの影響下で、それぞれの生態系を日々移動しながら生活していると考えられる。

自然因子は、生活する生活環境の気候・風土などであり、物理化学因子は環境汚染などの光・熱や物質であり、生物因子は植物、ペット・家畜、

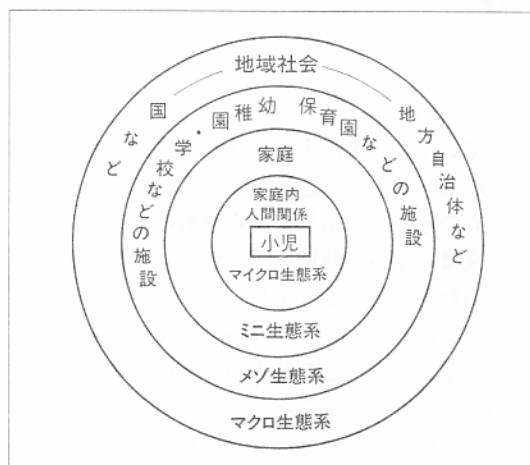


図1 小児の生態系

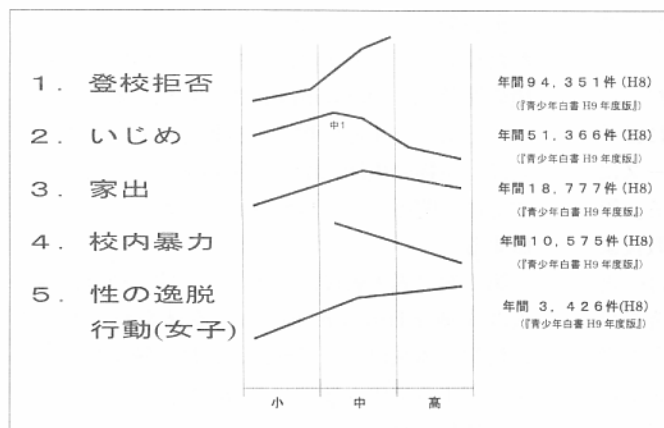


図2 思春期の問題行動の一般的パターン

さらには病原微生物などである。社会文化的因子は、家庭や学校のあり方、そして教育・医療・交通・通信・保育などの社会基盤、さらに流行・ジャーナリズムなどである。これらの因子の相互関係の中で、物質・エネルギー、そして情報が動き、子どもの生活に影響しているといえる。

子どもの心と体の健康を考える場合、こういった生態系の人間を除く構成因子の中で重要なものは、当然のことながら社会文化的因子であろう。即ち、人間のもつ高度の精神機能、「学ぶ」・「まねる」・「教える」、さらに「自分の考えていることを具体化・記号化する」などの機能によって、情報が伝達されて文化がつくられ、社会が機能している。

本論文では、現在みられる子どもたちの多様な問題を、このChild Ecologyの立場からを考え、その対応を理念的に述べる。特に心の健康を考え、メディア中心に社会文化が子どもたちの行動にどのような影響を与えているかを述べる。

Ⅱ. 思春期の問題行動には何がみられるか^{3, 4, 5)}

思春期にみられる問題行動、さらにそれに準ずる状態は多様である。アメリカなどの統計に比較するとまだまだその頻度は低いが、明らかに増加の傾向にあり、多くのことを考えさせる。青少年白書のデータを整理して、それぞれの一般的な傾向をまとめれば、図2のとおりである。それぞれについて、他の資料も参考にして下記に述べる。

1. 登校拒否・不登校

文部省は1991年から年間30日以上欠席者の調査を実施してきたが、1996年からは特別な病気によらない年間50日以上長期欠席者を「登校拒否」または「不登校」、現在はすべてを「不登校」と呼んで統計の対象にしている。

文部省統計によれば、不登校の直接のきっかけは、小学生では病気など本人にかかわる問題や家庭生活での影響がやや多く、中学生では学校生活での影響が最も多く4割以上に上る。とりわけ「友人関係をめぐる問題」(約20%)、「学業の不振」(約15%)などが多いのが特徴である。最近では「学校に行かない権利」を主張する子どもや親もいる点は注目すべきである。小・中学生を学年

別にみると、学年が上がるにつれて増加傾向がある。高校生に対するデータは発表されていない。

文部省の調査では、「学校嫌い」を理由に年間30日以上を長期欠席した不登校の小中学生は1996年度、前年より約1万3,000人増えて、過去最多の約9万5,000人である。小学生で約420人に1人であるが、中学生になると約60人に1人が不登校の計算になる。不登校児は91年度に現在の方法で調査がはじまって以来増え続けているが、96年度は前年度比約15%増の著しい増加となっている。

2. いじめ

文部省調査(1996)によると、いじめの発生校数も発生件数も増加し、それぞれ前年より約1,100校、約3,500件増である。学年別いじめ発生件数では、中一をピークにピラミッド状に分布している。いじめの様子は、「冷やかしく・からかい」「言葉での脅し」「暴力」「仲間はずれ」「集団による無視」(中学校)がワースト5で、従来と同じ傾向である。行政が力を注いでいるにもかかわらず減少しないこと、担任のいじめ発見率が低下していること、いじめられている本人からの訴えが増加していることが、最近の特徴である。

3. 家出

成人の浮浪者に当たるのが家出、青少年が家人に対する不満とか、他の者へのあこがれで家を出ることである。外国ではStreet Children、特に貧困によって、家庭崩壊などをおこし、路上で生活する子どもたちをさす。しかし、最近では先進国に、学ぶ意欲もなく路上生活に入る青少年が増えている。わが国でも、家出少年が増え、警察の統計によれば平成8年には小学生～高校生で約1万9,000件あり、高校生以上では女子が多少多くなる。

4. 校内暴力

中学校・高校の校内暴力には、「対教師暴力」「生徒間暴力」「学校の施設・設備等の器物破損」の3形態があり、公立学校における発生学校数の昭和60年から平成8年度の推移をみると、中学校・高等学校とも年々増加の傾向がみられる。平成8年の年間発生数は約10,600件である。

5. 女子にみられる性の逸脱行動

性の逸脱行動で補導した女子とは、売春防止法

違反事件の売春をしていた女子少年、児童福祉法違反（淫行させる行為）事件、青少年保護育成条例違反（みだらな性行為）事件および刑法上の淫行勧誘事件の被害女子少年、ぐ犯少年のうち不純な性行為を行っていた女子少年ならびに不良行為少年のうち不純な性行為をしていた女子少年をいう。発生件数約3,400件である。

これを動機別にみると、「遊ぶ金がほしくて」が最も多く、過去最高を記録し、遊興費を得るための性非行が目立っている。

6. その他

中高生の約65%が1年間で少なくとも1回は飲酒を経験し、約20%が喫煙を経験している。

Ⅲ. 情報化社会は Information Seeker として子ども達にどんな影響を与えるか。^{7. 8. 9)}

生まれたばかりの赤ちゃんは、産ぶ声が修まると周囲を見回しはじめることは、“Neonatal Alertness”として新生児学で古くから知られている。また、新生児でも単なる赤・黄・白の円形よりも、明らかに情報量の多い同じ大きさの新聞紙の円形、同心円の円形、さらには顔を描いた円形の方をみつめる時間が長いという事実も、1950年代初頭の心理学実験である。

これは、赤ちゃんは“Information Seeker”であり、人間は“Information Seeker”として生まれることを示す。この能力は、遺伝子で決まるものであることは、言葉、続いて文字からはじまり、木簡・羊皮紙、そして印刷機、電信・電話、さらにはテレビ・ビデオ・インターネットと情報機器の開発・発明の歴史をみれば明らかである。

こういった力があるからこそ、特に教えることがなくても、同じ部屋にテレビがあるだけで、2歳までには、生まれながらの高度の精神機能によって、子どもはテレビのスイッチの入れ方を学び、好きな番組を選び出すようになる。また、いかなるメディア機器を与えても、いじり回しているうちに、子どもは説明書なしに、その使い方をマスターするものである。

このような子どもの生まれながらの能力に加えて、わが国の社会でも、メディアの機器は急速に普及しつつある。1997年のベネッセの教育研究所

の調査によっても、小学生でも専用でテレビをもっている率は21%、家庭にあるのを含めると99%になる。子どもたちの52%はテレビゲーム、41%は電子手帳、24%はCDラジカセ、8.9%はワープロをもっているのである。携帯電話・PHS・ポケベルは1~2%という。中学生以上になると、いずれも所持率は高く、ポケベルにいたっては女子高校生で30%以上である。

テレビ時代に入ってから生まれた子どもたちが親になり、その親から生まれた子どもが生下時からこのようなマルチメディアの中で育ち、その影響ははかり知れないものがある。そのうえ、子どもは、“Information Seeker”であり、「メディア好き」なので、子どもたちの行動に生活環境にあるメディアが、いろいろな影響を与えるのは当然といえよう。

例えば友だちづくり、即ち“Peer Relation”のあり方にも、大きな影響があらわれてきている。従来は、遊びや学びの中、それぞれの住宅の地理関係、さらにはせいぜい電話によって友だちづくりをしてきたものが、いまやポケベル・携帯電話・PHSなどの新しいメディア機器によってつくられている。特に最近のプリントクラブによる友だちづくりは特異的であり、今後の子どもたちの生活を考えるのに有用である。

プリントクラブは、駅やアーケード、ゲームセンターなどにあり、スナップ写真を撮ると、直ちに切手サイズの16枚のステッカーのシールができる機械である。それが思春期の女の子の心をとらえブームをおこした。即ち、このステッカーを交換して、ノートに貼り付けることによって、友だちづくりをするのである。

私たちの調査によると、交換したシール数は300枚以上にピークがあった。しかも、友人数となると10~50人にピークがあり100人以上という子どもも少なくない。プリクラは、写真・手紙・名刺などより明らかに交換率が高く、しかも属人化も強いといえる。

Ⅳ. インターネットによる子ども学研究で何が学べるか

1992年春, Norwegian Center for Child

Research (ノルウェー国立子ども学研究センター) 主催の国際シンポジウム“Children at Risk”がベルゲンで開かれた。その折、これからの国際的子ども学研究のあり方に関する委員会が開かれ、今後はインターネットで行うことが可能であり、今後の展開が大きく期待される、ということになった。それに対応するために、ベネッセコーポレーションのご支援をいただき、福武教育振興財団の事業として、チャイルド・リサーチ・ネット (Child Research Net : CRN) をはじめた。

CRN は創立以来3年で、国内版アクセス数月約13万ほど、外国版月約3000ほどになる。外国版は、まだまだ工夫がいるが、国内版はそれなりの成果を上げているものと思われる。

CRN には、6つのセクションがあるが、フォーラムが最も人気があり、アクセス数全体の約20%を占める。子どもに関するさまざまな問題について、誰でも自由に発言し、議論し、意見を交換し合う場で、正にインターネットの特性を生かした意見のやりとりをみることができる。それを分析することによって貴重な情報が得られる。

1) 自由討議 (フリートーク) : 開設以来昨年末までの書き込み数約740でその折々の話題が論じられている。例えば、「所沢高校問題」、「神戸の少年事件」、「栃木のナイフ事件」、さらに「茶髪・ピアス」、「制服」、「高校生のアルバイト」、「一等賞廃止」などが出て、いろいろと討議された。茶髪・ピアスについては賛否は半々であった。

2) マルチメディア時代の子どもたち : 開始以来昨年末までの書き込み数約140で、マルチメディアが子どもの生活、さらに発育にどのように影響するか、いろいろな意見が出ている。特に「バタフライナイフとメディア」「テレビと子どもの生活」「たまごっちを与えてよいか」などは興味あった。

3) いじめ : 書き込み数は約290で親・教師の立場ばかりでなく、社会人の立場からもし始める側、いじめられる側のいろいろな意見が出されている。

4) 食文化 : 開始以来書き込み数約30で少ない。現在、子どもたちの食生活は乱れ、偏食・欠食などいろいろな問題が出ているが、それに対しての

意見が述べられている。

インターネットによる子ども学研究の最大の特長は、学会などと異なり、権威に関係なく発言し、また、社会に事件などがおこると、直ちにそれに対する意見が出て、やりとりがはじまるのも特長的である。

もちろん、インターネットをもたない人の意見は聞けないという限界は認めざるを得ない。しかし、数か月間に倍増という勢いでインターネットの所有者が増え、さらに政府も予算措置までして普及をはかっている現状をみると、Net 時代もそう遠くはないといえよう。

CRNが、Child Ecology について教えることは、従来の古典的な生態学の中では、生態系の中でのエネルギーの動きと物質の循環のみしか考えなかったが、人間生態学、さらにはChild Ecology の中では、情報 Information も考えなければならないといのである。

考 察^{10, 11, 12)}

思春期の子どもたちの心と体の健康を考えるには、子ども達の生活の場、家庭・学校・社会の情報と子どもの行動との関係を明らかにする必要があることは、上述からも明らかである。

胎児・新生児の成長・発達をみれば、人間は心と体のプログラムをもっているといえる。生まれたばかりの赤ちゃんが、産声とともに呼吸をはじめることは、われわれにそれを教えている。呼吸をはじめるのは、産ぶ声で呼吸のプログラムにスイッチが入り、口・鼻からはじまって肺までの気道、そして肺、さらに胸郭や横隔膜の呼吸筋などの呼吸システムを動かしはじめるからである。産ぶ声として泣くのは、お産の嵐や母子分離に驚き不安を感じる、脳にある心のプログラムによって、驚きや不安の感情をおこす神経細胞のネットワーク・システムが活動するからである。さらに、心拍動が胎児3週の胎児にみられるのは、循環のプログラムにスイッチが入っているから、また生まれたばかりの赤ちゃんが、母親の口出しをものまねするのは、模倣のプログラムによって可能になるといえる。

最近、昆虫などはもちろんのこと、人間を含め

て行動の遺伝子の存在が明らかになった。そういった遺伝子によって決まるプログラムが人間の行動を支配しているといえるのである。もちろんのこと、呼吸や循環を考えると、すべてのプログラムとはいえないが、多くのプログラム、特に心のそれは、子どもが育つ過程において、組み合わせが変わったりして、プログラムそのものが良くなったりすることが可能である。そのようなプログラムを働かすもの、さらに組み合わせで変えたりする力を情報がもっているのである。

情報を取り込んで自らのプログラムの組み合わせを変えたり、良くしたりするのは、人間のもつ高等の精神・心理機能の心のプログラムなのである。即ち、「学ぶ」「まねる」「考える」「憶える」「信ずる」などの心のプログラムが、外からの情報を取り込み他のプログラムに付加して、変えたり、良くしたりできるといえるのである。

心と体のプログラムと情報との関係を見ると、情報の質を考えなければならない。認知科学の研究成果は、人間の知能の働きにも、感性が重要な役割を果たしていることを明らかにし、コンピュータで知性ばかりでなく、感性も取り扱うことも考え、感性情報処理という方法も使いはじめた。音楽情報処理などはその代表のひとつである。

こういった立場から考えれば、情報は感性と知性の情報とに分けることができよう。もちろん、情報はこの二つに明確に対立するものではなく、多くの場合は表裏の関係にある。話し言葉によるコミュニケーションは、その音声のピッチ・抑揚・リズムなどによる感性の情報によって、言葉の知性の情報（意味）、が伝えられているのは代表であろう。母親側が子（特に乳児）に語りかけるマザーリス（母親語・育児語）を考えれば明らかである。

人間生活にとって、感性の情報は知性のそれと同じか、より以上に重要である。それは情緒剥奪症候群（母性剥奪症候群）などをみれば明らかであって、優しさなどで代表される感性情報がなければ、乳幼児の心と体のプログラムが作動せず、成長・発達が遅れ、また行動も異常になる。逆に優しさなどによって、乳幼児は生きる喜び一杯

“joie de vivre”になれば、すくすく育つのである。

思春期の子どもたちにとっても同じであっていわゆる問題行動も、その点から考えなければならない。

アメリカの National Longitudinal Study on Adolescent Health はそれについて多くを教えている。思春期の子どもたちが、両親さらに家族との人間関係、学校との関係の良さが、問題行動を抑制する。こういった人間関係の良さは、当然のことながら、親・家族・教師などの人柄・人格とか、子どもたちへの優しいまなざし、そして理解が基本となる。それが、家庭や学校の感性の情報となる。

一方、家庭での薬物使用は、タバコ、アルコール、マリファナなどの使用と学年を通じて関係があった。また、学業成績に関心のある家庭では、問題行動の頻度は低く、両親が早い初体験に批判的であると、子どもの性体験は遅くなっていた。これらの結果は、家庭のあり方を含めた、子どもの生活環境の情報が問題行動に対する影響を示している。

わが国でも、このような調査研究が行われることが、われわれの当面している思春期の子どもたちの心と体の健康をつくる方法を明らかにするのに必要である。

少なくとも、家庭・学校・社会は、Child Ecology からみれば、Mini-ecosystem, Meso-ecosystem, Macro-ecosystem として、お互いに影響し合っていることは明らかであり、そのそれぞれを子どもたちの生活の場として良いものにしなければならない。この場合、情報のあり方も考慮する必要があることを強調したい。しかも、知性の情報として、社会規範などは当然のことながら、感性の情報としても、優しさ・うるおいというような人間的なものも考えなければならない。

謝辞：本論文は Child Research Net の島内行夫氏、小泉和義氏、譲原聡子さん、池橋みどりさん、田所直子さんのご支援なくしてはまとまらなかったことを付記してお礼を申し上げる。

文 献

- 1) N. Kobayashi : Child Ecology, Theoretical Basis for Solving Children's Problems in the World, Childhood, 1 : 26-37, 1993.
- 2) E. P. Odum : Basic Ecology CBS college Publishing, 1983 (三島次郎訳基礎生態学, 培風館, 1995) .
- 3) 池橋みどり : 思春期の問題行動に関する調査ノート, 私信.
- 4) 総務庁青少年対策本部 : 青少年白書 (平成9年度版) 134-146, 大蔵省印刷局, 1998.
- 5) ベネッセ教育研究所 : モノグラフ・中学生の世界vol. 54「規範感覚」と「いじめ」, ベネッセコーポレーション, 1996.
- 6) ベネッセ研究所 : モノグラフ・高校生vol. 52援助交際, 1998.
- 7) ベネッセ研究所 : モノグラフ・小学生ナウvol. 17-2子どもとメディア, 1997.
- 8) 河村智洋 : 修士論文・女子中高生のピアリレーションシップ発達段階におけるメディアの影響についての考察—ブリクラの意味するもの, 1997.
- 9) N. Kobayashi : Print Club in Japan, the Multimedia Society produces New Behavioral Pattern of Adolescent Girls in Peer Relationship, The International Interdisciplinary Conference "Urban Childhood", 6月9日-12日, Trondheim Norway, 1997.
- 10) J. Z. Young, Programs of the Brain, Oxford University Press, 1978 (嶋井和世監訳 : 脳と生命, 秘められたメカニズム, 広川書店, 昭和62年).
- 11) M. D. Resnik et al. : Protecting Adolescents from Harm, Finding from the National Longitudinal Study on Adolescent Health, JAMA, 278, 10 : 823-832, 1997 (土居あゆみ, 吉原直子, 垣迫三夫, 富田和巳訳, 青少年を問題行動から守る方法, 青少年の健康に関する全国縦断調査結果, JAMA 日本語版, 79-92, 1998年4月号).
- 12) 辻三郎 (編) : 感性の科学, 感性情報処理へのアプローチ, サイエンス社, 1997.